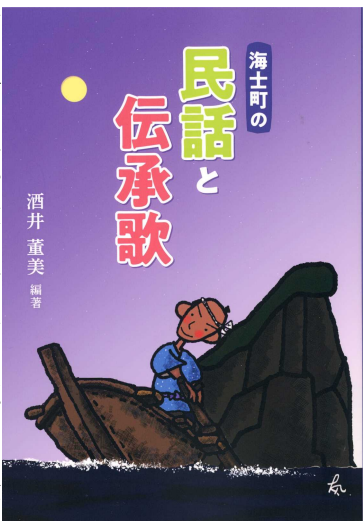


『海士町の民話と伝承歌』のこと

酒井 董美^{ただよし}資料を収めたCD
【YouTube作成に使った】

米子市の今井出版から筆者編著『海士町の民話と伝承歌』(A5判・189ページ)が発刊された。半世紀前、県立隠岐島前高校郷土部は、隠岐全域の民話や歌など収録したが、高校所在地のある海士町での資料を、海士町役場から隔月発行の『広報海士』に、平成22年3月号から今年の3月号まで連載したものであり、同町出身で埼玉県三郷市在住の福本隆男君が、内容にふさわしいイラストを、毎回描いている。そして内訳は民話が49話、伝承歌12曲になっている。こう書けば海士町在住の



本の表紙

古者から聴いた話や歌が収められている単行本なのだと思うところであろう。なるほど一応はそれでよいのであるが、どっこい、この本にはもう少し注釈が必要なのである。それは話や歌ひとつひとつの解説の後に二次元バーコード(俗にQRコードといっている)がつけてあり、スマホなどでコードを読み取ると隠岐アイランズ・メディア(海士町)作成のユーチューブに飛び、半世紀前の語り手や歌い手の声が聴ける仕組みになっていることである。ただ、歳月の経過は厳しく、3点ばかりは音源が見つからない。しかし、文明の進歩の成果を逃さず活用することにより、亡くなった方々が、その当時、郷土部の諸君の懸命の聞き出しに応じて、笑顔で応じてくださったっていた様子が、そのまま再現されるのであるから、これは海士町に伝わる貴重な無形民俗文化財を収めた資料的な書籍ということになる。まさか後年、このような形で高校の部活動の結果が、書籍化することになるうとは、当時は考えもしなかったことであった。

収録に当たった生徒諸君も、早いものであれから半世紀。孫のいる者も何人かはいらぬ。そして地元の無形伝承文化財を、こつこつと地道に集めた努力が、こうして残ることになり、部活動の成果が、これからの町づくり役に役立つことになるわけだから、高校生の部活動の重要性を示したことになるのである。

思えば、当時部活動の予算は嘘のような話であるが、ゼロであった。テープレコーダー、録音カセット、隣の島に渡る船賃、収録後の礼状に使う葉書などは、自前で調達して活動を続けていたものである。必要経費はどう捻出したかと言えば、集めてきた資料を紙に清書し、それを学校の印刷機で印刷。松江市の業者に出して製本して販売する。本には半ページ5000円、1ページ1万円の広告を取って活動費を捻出したものである。ダイレクトメールを全国の研究団体に送ることで1部5000円の機関誌『隠岐島前の伝承』が300部くらいは販売できたように記憶している。スタートこそ辛かったが、結果的には経済的に苦しむことはなかった。機関誌が完成すると、海士町でたった1軒の西洋料理店で完成祝いの夕食会をしたのも懐かしい。本が完成した今、郷土部の顧問だった筆者は、誇りを持って当時の部員諸君と共に、こうした裏話を披露したいのである。(購入希望の方は酒井まで☎0852(23)1935。送料代含めて1500円でお分けします)